

Title	其角『花摘』のかたち
Author(s)	根来, 尚子
Citation	語文. 2012, 98, p. 1-11
Version Type	VoR
URL	https://hdl.handle.net/11094/69192
rights	
Note	

Osaka University Knowledge Archive : OUKA

<https://ir.library.osaka-u.ac.jp/>

Osaka University

其角『花摘』のかたち

根 来 尚 子

一 はじめに

其角が句集は聞えがたき句多けれども、読むたびにあかず覺ゆ。
 (蕪村『新花摘』寛政九年刊¹⁾)

蕪村も其角の句集を楽しんだ読者のひとりであった。「俳中の李青蓮」と評される其角であるが、その其角の句においてさえ、「百十の句のうち、めでたしと聞ゆるは二十句にたらず」に思われると蕪村は言う。難解な句も多いが、それでも飽きることなく何度も繰り返し読んでしまう、そこに其角の魅力を蕪村は認めている。読むたびにあれやこれやと考えをめぐらし、そして時には新たな発見があり、と知的な楽しみの世界に読む者を誘う、それが「其角が句集」の魅力の一つであったのだろう。

其角の句集の読者であった蕪村が惹きつけられたのはそこに収められる其角の句の面白さだけではなかったようである。其角の撰集全体のスタイルにもあった。そのことは右の一文を収める蕪

村の『新花摘』が其角の編んだ『花摘』の「かたち」を取り入れていることから明らかである。

二 『花摘』のかたち

『花摘』は其角が亡母の四回忌追善のために、元禄三年に編んだ撰集である。この『花摘』は四月八日から七月十九日までの百日間、日付とともに句を書き記すという、句日記の形式をとっている。蕪村が亡母追善のために発企した『新花摘』も四月八日から毎日約十句の句作を試みた集である。残念ながら蕪村は途中で絶しているが、『花摘』に「新」と冠して『新花摘』と題した本書が其角の『花摘』をモデルとしていることは明らかであろう。この句日記のかたちは、其角のオリジナルではない。宗祇にならったものである。

元禄三年の事にや。母の寺に詣まかりしに、四年過つる春秋も、悲しびをもよほすかた多かりければ、思ひを是によせ

て、心ざしを手向侍りしより、彼、祇公の一とせの日次を発

句つかうまつれりし海山の情、雲水のあはれをも、転法輪讃
仏乘の道に入とのみおもひなし給ひけん。いざ我心、朝夕の
人のすくなき折く、聊ものにかきつく。一夏百句にみちた
れば、花摘と名付侍る也。その日・其夜の見聞の句々、結縁
となして予が句の下にこれをとりなしつゝ、見ん人々のにぎ
はひと成ぬ。高位高德、師弟親疎をわかつ事なきは、日記な
れば也。

一 燈礼 其角述

右の『花摘』序文に、宗祇が「一とせの日次を発句」に詠んだ
ことにならったものであることを其角は述べている。宗祇の「一
とせの日次」とは、『宗祇日発句』のことで、これは一月一日か
ら十二月三十一日までの一年間の、一日一句を記した句集である。
写本をはじめ古活字版、版本まで広く流布している。『花摘』に
収める、

(六月) 五日 祇公日次の題をとりあはせて

河簀垣徳利もひたす流哉

(其) 角

の其角句は、『宗祇日発句』六月十三日に載る「河簀／水にすむ
月みところか河すがき」によって作られたものであり、其角も本
書を読んでいたことがうかがえる。その日発句の形式を、其角は
母の追善集を編むために利用したのである。

其角の母が没したのは、貞享四年(1687)四月八日であっ
た。『統虚栗』(貞享四年)に、

四月八日母のみまかりけるに

身にとりて衣がへうき卯月哉

其角

初七ノ夜いねかねたりしに

夢に來る母をかへすか郭公

同

という追悼句が収められている。『花摘』序文には、母の四回忌
にあたる元禄三年(1690)、母の命日である四月八日に墓参
をし、宗祇にならった日発句の試みを思いついたと記されていた。
『花摘』は墓参をした、四月八日の「上行寺／准仏や墓にむかへ
る独言」という其角の発句から始まる。そして、月命日の六月八
日には「母の日や又泣出すまは瓜」と詠み、満百の七月十九日
には「有明の月に成けり母の影」の発句を手向けている。序文に
「一、燈礼、其角」と署したのも、山田荀深の記した跋文に、「捻
香摘」英、挑「一」灯「一」吟、以供「聖」論「之」追「福」とあるこ
とからすると、母の追善のために一燈の下で一吟を詠み礼をつく
すという追善の姿勢の表明であった。其角が貞享二年に編んだ
『新山家』は「紀行」という「かたち」をとった、其角の師大願
和尚の追悼集であった。そして今見る『花摘』は「日発句」とい
う句日記の「かたち」をとった其角の母の追善集である。『新山
家』では紀行という形式をまねることで、さまざまな工夫を凝ら
して集を編んでいた。今回其角は、句日記という形式をどのよう
に生かして『花摘』を編みあげたのであろうか。

三 日記なれば

母の追善を表明した『花摘』であるが、『花摘』に収められる

のは母への追悼句ばかりではない。一夏百句をこころみる其角の百日間の日常をうかがわせる句や、其角の見聞した句をも記している。だから例えば、

(七月) 八日 三遷のおしへに慣ひて七ッになりける姪を寺

へのぼせたれば、一月ありて七夕に哥奉りけるをいとをしみて

文月や産るゝ文字も母の恩 (其) 角

といった姪との心温まるやりとりがあったり、

(六月) 十八日 伊勢の国にて、狐の人につきて云出ける句

仁あれば春も若やぐ木目哉

此狐つき日比の田夫にてぞ有ける。狐いにて後は無筆なりしと也。其筆跡正しう狐にて侍れば、哥にあやしく、たえなるためしにもと書付侍る。

元禄元年七月の事にや。という過去に見聞した奇談があったり、と話題は様々に及ぶ。

五月一日には、「卯月十八日の文の中に聞ゆ」と注して、去來の俳文「単説」を長々とかかっている。これは「いつをむかしのねうびく、つくぐ承りて、法師ばらに申つたへたれば、相れ崩おしえありがたく侍るほどに、一夏百句のけちゑんにとて、此集にかき次侍るなり」と注するように、其角の前作『いつを昔』(元禄三年四月刊)に収める「ねうびく(比丘)」という老猫を詠んだ其角の連作句に縁あるものとして、去來から送られてきた

「単」についての俳文を書き付けたのであった。続く五月四日も、「午の年、午の月、むまの月、午の時うけに入ノ競馬埒^まに入身のいさみ哉」という其角句と「同じくノ有卦に入笑の皴ぞ酒による」という百里句を並べた後で、「雨ふりて人の來たりける日書次」と前書して、素見以下、角上、枳風、湖春、路通、尚白など各人の四十句にもわたる発句を書き連ねているが、これらも「右四十句俳番匠之墨糟也、仍^り駈入競馬之埒^ま一畢」と注するよう(1)に、「いつを昔」(初め『俳番匠』という書名で刊行する予定であった)に関連するものであった。

そもそも日記とはプライベートな記録であるから、そこに書きつける内容に制限はない。日々感じたことや、見聞したこと、そしてさらには前作の撰にもれた反古を書き留めておいてもよいわけである。しかしその日記が出版され、おおよけにされるとなると話は別である。そこには当然「読者」が存在することになるからである。そのことを意識しない其角ではなかった。序文に「その日・其夜の見聞の句々、結縁となして予が句の下にこれをとりにしつゝ、見ん人々のにぎはひと成ぬ」とあったことに注意したい。其角は「見ん人々」つまり読者を想定して句を書きつけていたのである。読者は、其角自身についてはもちろん、其角周辺の人々の様子を楽しみ、場合によってはみずからの句が入集する喜びをも味わうことになるのである。一度は撰にもれたと思っていた句がこのたび陽の目をみるようになったとなればその感慨もひとしおであろう。日記という形式の自由さを活用しながら、読者

の楽しみをも十分意識して其角は編集にあたっていたのである。

序文に続けて其角は、「高位高德、師弟親疎をわかつ事なきは、日記なれば也」と記していた。『花摘』におさめる次のやりとりが書き記されるのも本書が日記だからこそ可能だったのであろう。

(五月)十日 三蔵といひけるかたいのもの、つゞれたる袋より俳諧の哥仙取出して、点願はしきよしを申てしざりぬ。其巻の前書に、こゝにいやしき土の車の林の陰に、身をかなしめる有と書り。いかなるものゝなれるはてにか有けん、かの巻の奥書に申つかはしける

あまさかる非人貴し麻蓬

(其)角

梅が香や乞食の家もと聞えつる、にほひ有けるにや。かゝる功德をうけ給て

名木を乞食に習ふ桜かな

山川

三蔵という乞食が俳諧という風雅を楽しんでいることに感銘を受けた其角が「あまさかる」の発句を書き送ったというエピソードである。自分の高低を分け隔てすることなく、その作品を書きつけることができるのも、これが日記というかたちをとっているからこそ可能なことなのだ和其角は述べている。『花摘』には他にも、「盲人滑橋」「少年亀翁」「妓童棚雲」「妓童松嵐」「妓童梨水」「少年匏瓜」「小僧文松」といった人々の発句が入集している。

さて、このエピソードには続きがある。六月十日の項に、

法華本門の心を

雨露は有漏の恵ぞもとの花の雨

車輪下非人

麻よもぎといふ句を結縁に申つかはしたれば、我母の追善とて此句を送りける也。翁当歳旦に、こもを着て誰人います花の春、と聞えしも未来記なるべし。

とあり、先の「あまさかる非人貴し麻蓬」句を受け取った乞食が、其角の母の追善にと、「雨露は」の句を送ってきたのである。ここで其角が芭蕉の「こもを着て」句を思い起こしていることに注意したい。

芭蕉の「こもを着て」句は、其角が『花摘』を編んだ元禄三年の歳旦吟であった。「元禄三元旦 みやこちかきあたりにとしをむかへて」と前書した真蹟草稿の他、嵐雪の『其袋』(元禄三年六月序)にも「都ちかき所にとしをとりて」と前書して収められる。元禄二年九月、「奥の細道」の旅を終えた芭蕉は、引き続き上方に滞在し、伊勢、伊賀、奈良、京を経て大津膳所で越年する。「こもを着て」句は「都ちかき」膳所で詠まれた発句であった。本句を知らせる一月二日付荷分あて書簡や、一月十七日付万菊丸あて書簡が残っている。おそらく江戸の其角らのもとにも芭蕉からの知らせが届いたのであろう。この芭蕉句を解するには、四月十日付此筋・千川宛書簡に、「五百年來昔、西行の撰集抄に多くの乞食をあげられ候。愚眼故能人見付ざる悲しさに、二たび西上人をおもひかへしたる迄に御坐候」と芭蕉みずから記していることが手がかりになる。芭蕉の時代には西行作とされていた『撰集抄』に乞食の身にやつした尊い僧の姿が多く描かれているが、自

身の愚眼ゆえそのような僧を見つけることができない悲しさから、今、再び西行のことを思い起こして、この華やかな都の土地に『撰集抄』に見えるような聖僧が乞食にやつしてこもを着ていらっしやるかもしれない、と詠んだ句であるという。しかしながら、京には芭蕉の意図を理解してくれる人物は存在しなかったように、京の者共はこもかぶりを引付の巻頭に何事にやと申候由、あさましく候」と芭蕉は同書簡で嘆いている。京の人々は歳旦句に乞食を詠むという一見非常識な句作をとがめるばかりで、芭蕉の真に意図する風雅までは理解できなかったのである。

ところが、京の人の反感を買い、芭蕉が「愚眼故見付ざる」と悲しんだ、風雅を解する乞食がまさに、其角の近くに存在していたのである。芭蕉の歳旦吟は、其角にとっては、今の自分と乞食との交流を予言した「未来記」のような句である。このことを記さずにいられようか。しかも自分がいま書いているのは個人的な記録である「日記」なのだから、他の人から反感を買うこともあるまい……。其角は日記という「かたち」のもつ特徴を最大限に生かして乞食とのやりとりを書き記したのである。

四 「奥の細道」の芭蕉

乞食の句に師芭蕉のおもかけを見た其角であったが、「奥の細道」の旅の後も、上方に滞在し続けた芭蕉のことが、遠く離れた江戸にいる其角の念頭から離れることはなかった。何かにつけ思い起こされるのは芭蕉のことである。

四月二十八日には、「ある人の別墅にて／内川や鳩のうき巢に鳴蛙」という其角句のあとに、「此日閑に飽て翁行脚の折ふし、羽黒山於本坊興行の哥仙をひらく。元禄二年六月にや」と前書して、芭蕉の「有難や雪をめぐらす風の音」を発句とする、露丸・曾良・釣雪・殊妙・梨水・円入・会覚による八吟歌仙を書き記している。この歌仙は其角が「元禄二年六月にや」と注するように、元禄二年六月、「奥の細道」の旅中、羽黒山本坊で興行した歌仙である。『曾良旅日記』によると、本歌仙は六月四日に興行するも、表八句で中絶。これを継いで翌五日に一折まで終え、さらに継いで九日によく満尾に至ったことがわかる。『曾良旅日記』には歌仙の全句を書きとめているが、そこでの芭蕉発句は、「有難や雪をかほらす風の音」で其角が『花摘』に記すものと句形が異なる。芭蕉自筆『奥の細道』では、「四日 於本坊俳諧興行／有難や雪をめぐらす南谷」と発句のみを記し、下五を「南谷」とする。中七については、「めぐらす」の句形を見せ消しで訂正して「かほらす」に改めている。おそらく曾良の書きとめる「かほらす」が初案であったのであろうが、その後、芭蕉のなかで「かほらす」と「めぐらす」の間で揺れがあったようである。『花摘』にこの歌仙につづけて記される、

湯殿

語られぬゆどのにぬるゝ袂哉

翁

月山

雲の峯いくつ崩れて月の山

同

同じ山行

鶯の声賤しさよ夏の雪

観修坊釣雪

の三句も羽黒山での吟で、芭蕉の二句は『奥の細道』にも載る。

ただし、「語られぬ」句は、『奥の細道』では中七が「湯殿にぬらす」となり、『曾良旅日記』も「湯殿にぬらす」の句形を書きと

めている。若干の句形の違いはあるが、『花摘』編集時には、『奥

の細道』はもちろんまだ世に存在しておらず、『曾良旅日記』は

あくまで曾良の手控え的なものであったから、芭蕉の「奥の細

道」の旅における歌仙ならびに発句を初めておおよけにしたのは

其角の『花摘』になるわけである。

『花摘』にはほかにも芭蕉の句が十句書き記されている。以下、

記載される『花摘』の日付と芭蕉句、そして芭蕉の作句時期の順

に掲げてみることにする。

① 四月廿七日 膳所へゆく人に

瀬の祭^{まつり}見て来よ瀬田のおく

元禄三年春

② 五月朔日

地くふときけばおそろし雉の声

元禄三年三月下旬

③ 五月四日

木下の汁も膾も桜かな

元禄三年三月

④ 五月四日

畑知音やあらしのさくら麻

元禄三年三月

⑤ 五月四日 いせの国中村といふ所にて

秋の風伊勢の墓原猶すこし

元禄二年九月下旬

⑥ 五月四日

たうとさに皆をしあひぬ御迁宮

元禄二年九月十三日

⑦ 五月四日 ならにて

雪かなしいつ大仏の瓦葺

元禄二年十一月末

⑧ 五月四日

いざさらば雪見にころぶ所迄

貞享四年十二月

⑨ 五月四日

何に此師走の市にゆくからす

元禄二年冬

⑩ 六月十日

せゝ草菴を人ぐとひけるに

元禄二年十二月末

五月四日に③から⑨の七句もの発句が記されるのは、この日が

「右四十句誹番匠之墨糟也」として『いつを昔』の撰にもれた句

を書きとめた日にあたるためである。これらの句は、当初、元禄

三年四月刊行の『いつを昔』に収録する予定であったものである。

⑧の句が貞享四年十二月、芭蕉の「笈の小文」旅中の句（ただし

『笈の小文』では上五を「いざ行かん」とする）で最も古い、

これは、『いつを昔』が前作『続虚栗』の刊行された貞享四年十

一月以降の句を収録するためである。この⑧を除く残り九句は、

すべて、元禄二年九月六日「蛤のふたみに別れ行く秋ぞ」の吟を

詠み、「奥の細道」の旅を終えた後の句である。『花摘』の編集が

元禄三年四月から七月の間になされたとする、其角は、元禄二

年九月から元禄三年三月にかけての、いわば、「奥の細道」直後

の最新の芭蕉発句を書き記していたのである。なかでも、③はは

じめ、芭蕉が元禄三年三月二日に伊賀の小川風表亭で興行した連句の発句であったものを、伊賀より膳所に移った三月下旬に、珍碩・曲水と歌仙を巻いた際に発句となしたもので、この膳所での三吟歌仙が、のちに「かるみ」の新風を初めて世間に問うた『ひさご』（元禄三年八月刊）の巻頭に収録されることになるのである。また、⑤の句は、『去来抄』に去来が「不易」の句として宗鑑・貞徳の発句とならべて掲げている（ただし、去来自筆草稿にもっとも近いとされる国立国会図書館蔵写本では上五を「初風や」とする）。いずれも、芭蕉の俳風をうかがう上で重要な発句が『花摘』に採録されているのである。

なお、②は、「うつくしきかほかく雉のけ爪かなと申たれば」と前書が付く。すなわち、其角の「うつくしき顔かく雉の距かな」（『其袋』・『五元集』などに収録）に芭蕉が唱和した句だ、というのである。この芭蕉句は土芳の『芭蕉翁全伝』に、「此二句ハ膳所ニ行トテ出ラレシ道ヨリ、物ニ書付テ半残迄見セラレシナリ」として掲げるうちの一句で、芭蕉が伊賀より膳所に出る道中、半残に書き送った句であることが記されている。一方、『三冊子』では、芭蕉自身がこの句を其角句と対比させている。其角と芭蕉との間で実際に書簡などを通して前書のような応酬がなされたのかも知れないが、あるいは、芭蕉が伊賀で詠んだ句に、其角が後から発句をなして『花摘』に入集させたのがよく知られるようになり、のち『三冊子』で芭蕉自身も其角の句と対比させることになったのかとも考えられる。いずれにせよ、ここで注意すべきは、

其角と芭蕉との間で唱和のころみが見なされていること、そして其角は、芭蕉の最新作をみずからの撰集に加えておおよけにすることが許されていたことである。延宝の初めから歩みを共にしてきた其角と芭蕉との信頼関係があつてこそ可能だったのである。

五 幻住庵の芭蕉

さて、いま、芭蕉の最新の句風を『花摘』によって知ることができる、と述べたが、厳密に言うくと、先に挙げた「奥の細道」前後の芭蕉の作品は、芭蕉の「最新作」ではない。其角が『花摘』を編んだ元禄三年四月から七月にかけての芭蕉の句が全く入っていないからである。この時、芭蕉はどこで何をしていたのか。其角が四月八日から七月十九日まで一夏百句をこころみ『花摘』を編んでいた時、芭蕉が滞在していたのは石山の幻住庵であった。芭蕉が幻住庵に入ったのは元禄三年四月六日。途中、一時京に出ることもあったが、七月二十三日までこの庵で過ごし、「奥の細道」の長旅の疲れをいやしていた。

其角はその芭蕉の幻住庵の様子を江戸にしながらにしてつぶさに知ることができたようである。

四月晦日

石山幻住菴をかたり出て

郭公背中見てやる麗かな

曲水

鉢なき山をつゝむ夏草

其角（以下略）

『花摘』の追加に、右のような曲水発句・其角脇による両吟歌

仙が収められている。曲水は幻住庵にゆかりの深い人物である。

すなわち、幻住庵はこの曲水の伯父である幻住老人の庵であり、幻住老人亡き後は、曲水が管理し、これを芭蕉に提供したのであった。しかし、膳所藩士であった曲水は芭蕉に庵を提供するや江戸勤番となり、曲水の江戸滞在中は、曲水の弟の怒誰が芭蕉の世話をしていた。芭蕉は入庵間もない四月八日、早速怒誰にあって報告の手紙を書いており、また、江戸の曲水にも幻住庵の近況を記した書状を送っていたことが知られる（曲水あてと推定される四月中火中止め書簡・六月三十日付曲水あて書簡）。四月晦日、江戸勤番中の曲水と其角との間で話題になったのは、何よりも幻住庵滞在中の芭蕉のことであった。曲水は、芭蕉が閑居生活を送る庵の様子をもっとも詳しく語ってくれる人物であった。六月十日にも、「曲水の旅宿に訪て湖水をおもひ出しに」と前書した其角の発句「漣やあふみ表をたかむしろ」につづけて前節に⑩としてあげた芭蕉発句「せゝ草菴を人ぐとひけるに／あられせば網代の水魚を煮て出さん」を掲げている。この芭蕉句は元禄二年十二月末、膳所での作であり、曲水と芭蕉の間で幻住庵提供の話がでたのが、この時である。曲水の江戸旅宿を訪問した其角が思いを寄せるのはやはり近江にいる芭蕉のことなのである。

『花摘』に収める曲水の発句には、幻住庵の様子を彷彿とさせるものがある。六月五日にある、

夏山や菴を見かけて二曲り

曲水

おもふ事だまつて居るか暮

同

の二句は、

石山の奥、岩間のうしろに山有、国分山と云。そのかみ国分寺の名を伝ふなるべし。麓に細き流を渡りて、翠微に登ると三曲二百歩にして、八幡宮たゝせたまふ。神体は弥陀の尊像とかや。唯一の家には甚忌なる事を、両部光を和げ、利益の塵を同じうしたまふも又貴し。日比は人の詣ざりければ、いとゞ神さび物しづかなる傍に、住捨し草の戸有。よもぎ・根笹軒をかこみ、屋ねもり壁落て狐狸ふしどを得たり。幻住庵と云。（『幻住庵記』）

とある、国分山を「三曲二百歩」（初稿本類にあたる『芭蕉文考』所収写本には「坂の間三曲り、のぼる事一丁余半」とある）行ったところにある八幡宮のかたわらに位置する幻住庵への「神さび物しづかなる」道のりを想像させる。また、七月八日に記される、

幻住菴山上

木啄の柱をつゝく住居かな

曲水

山下にて

物種よ小松にまじるけしの花

曲水

の句のうち、「木啄の」句も、「幻住庵記」に「さすがに春の名残も遠からず、つゝじ咲残り、山藤松に懸て、時鳥しば／＼過る程、宿かし鳥の便さえ有を、木つゝきのつゝくと、いとはじなど、そゞろに興じて、魂呉楚東南にはしり、身は瀟湖洞庭に立つ」とある庵の情景に重なる。

幻住庵滞在中の芭蕉が曲水に送った書簡で現在知られるものは、曲水あてと推定される四月中火中止め書簡ならびに六月三十日付書簡の二通のみであるが、その六月三十日付書簡には「当四日・十四兩通之貴翰無_レ恙落手、於_レ幻住庵_一披覽、舒卷対顔の思をなし、御懷敷奉_レ存候」とあり、江戸の曲水から芭蕉にあてても度々書状が送られていた事がわかる。そうした手紙での交流を通して、芭蕉から曲水に、そして曲水から其角に、芭蕉の庵住生活の様子が伝えられたのである。

もちろん、其角のもとに芭蕉の手紙がもたらされることもあった。

(六月) 九日 翁よりの文に、都の涼み過て、又どち風になりともまかせてなど、聞へけるをとどめて

丈山の渡らぬあとを涼み哉

(其) 角

曲水宛六月三十日付書簡に芭蕉自身が「六月初メ出京、三五日と存候処におもひの外長滞留、十八日迄罷過申候」と記すように、芭蕉は六月初旬に一度幻住庵から京に出て、十八日迄滞在している。その後また幻住庵に戻るのであるが、そのことを其角は手紙で知ったようである。前書にある「又どち風になりともまかせて」という言葉は、京を出て幻住庵に戻った芭蕉が六月二十日に記した小春宛書簡において「残生いまだ漂泊やまず、湖水のほとりに夏をいとひ候。猶どち風に身をまかすべき哉と、秋立比を待かけ候」と使っていた言葉であり、おそらく其角のもとにもこうした手紙が届けられたのであろう。

また、其角から芭蕉に向けて度々手紙が送られていたことが元禄三年九月十二日付曾良宛芭蕉書簡に、

一、其角は度々書状さし越、又人々の便にもさた承候。：(中略)：其角、花摘出版のよし。是は前々より段々委細に申聞かせ候。定而面白かるべくと待かね候。

とあることによって知られる。其角は編集中の『花摘』について度々報告することがあったらしく、その刊行を芭蕉も心待ちにしていたようである。京滞在後芭蕉が曲水にあてた六月三十日付書簡の末尾に、「此度の出京滞留、暑気につかれ候而俳諧一句も不仕候。：(中略)：おもふことふたつのけたる其あとは花の都も田舎なりけり、と申候而、山庵へ迹帰候」と狂歌をまじえてつづいたのは、諸注が指摘するように、『花摘』追加に、「四月晦日石山幻住菴をかたり出て」と前書して掲載する、曲水・其角両吟歌仙の中の、

おもふ事二ツのけたる其跡は
曲水
花の都も田舎也けり
其角

の付合をそのまま狂歌に転用してユーモアを交えて返信としたものであった。江戸と近江と、離れた所にあっても、互いの状況を知ることができたのである。『花摘』に記される幻住庵の様子はそうした交流によって知り得た芭蕉の現在の閑居生活をありありと想起させるものであった。

六 『花摘』のその後

ここでもう一つ、注意しておきたいのは、前節の、芭蕉の出京を報じる書簡のことを記す六月九日の項が、実際に芭蕉が出京した六月十八日より早い日付の日に書き記されていることである。序文で其角は、「その日・其夜の見聞の句々、結縁となして予が句の下にこれをとりなしつゝ、見ん人々のにぎはひと成ぬ」と記していたが、この序文通りに日々書き続けていったのではなく、実際にはある時点で編集されたものであったことがうかがえる。『花摘』は「見ん人々」を意識して編集された「日記」なのであった。

その目的の一つは、たしかに母の追善であろうが、これまで見てきたように、『花摘』を編む其角の念頭につねにあったのは、師、芭蕉のことである。江戸を離れて久しい芭蕉の消息を、編著を通して読者に知らせるという目的もあったのではないか。そしてまた、逆に、江戸を離れた地で過ごす芭蕉に、其角をはじめとした周辺の人々の動静を伝えるという目的もあったのであろう。『花摘』に記される期間が、芭蕉が幻住庵で過ごした四月から七月までとほぼ一致するのは、単なる偶然であろうか。芭蕉が幻住庵で過ごしていた間、江戸の其角の周辺ではどのようなことがあったのか、どのような俳諧がおこなわれていたのか、手紙では書ききれない日々の出来事を、其角は「句日記」に託して芭蕉に報じたのではないだろうか。『花摘』におさめる、風雅を解する

乞食との交流は、京には「こもを着て」句の風雅を理解する人々がいないと歎いていた芭蕉に向けて、江戸には芭蕉の理解者がいますよ、との思いを込めて其角が書き留めたものと思われるのである。

元禄四年七月、芭蕉が京の去来・凡兆と共に編集した『猿蓑』が刊行される。ここに芭蕉の幻住庵での生活を記す「幻住庵記」が収録されている。その「幻住庵記」の末尾に「凡右日記」として、庵の提供者曲水の「時鳥背中見てやる麓かな」をはじめとして、以下来訪・来信の人々の発句が掲げられている。曲水の句は、『花摘』に「四月晦日／石山幻住菴をかたり出て」と前書する曲水・其角両吟歌仙の発句であった。芭蕉が狂歌を仕立てたのはこの歌仙中の付合であった。また、「凡右日記」中の、「いつたきて露の葉にもるおぶくぞも 里東」句も、『花摘』七月八日に、「石山幻住菴は、芭蕉翁かりに徜徉せし所也。ひと日仏餉をまいらすとて／いつたきて露の葉盛の御仏餉ツツぞも 里東」として載る発句である。芭蕉が、人々の発句でもって庵住生活の様子を描きだそうとする、そこに「凡右日記」と題した時、其角の『花摘』が念頭になかったはずはない。其角が江戸での生活を句日記というかたちで『花摘』につづったのに応じるべく、芭蕉も「日記」というかたちでもって、幻住庵での日々をつづったのではないだろうか。其角の句に芭蕉が唱和うたわしたように、「日記」というかたちでの応酬がなされたのである。

「日記」というかたちはその形式が内容を制限するどころかむ

しろ、その形式を巧みに利用するならば自由に編者の世界を綴り出すことが可能であるということを示した其角の『花摘』の「かたち」は、芭蕉のみならず、その後にも、二世湖十の『続花摘』（享保二十年刊）や、さらには、蕪村の『新花摘』（寛政九年刊）によって受け継がれることになるのである。

注

- (1) 引用は『蕪村全集』第七巻（平成七年、講談社）による。
- (2) 『宗祇日発句』は宗祇作とされているが確証はない。なお、諸本等については、湯之上早苗氏「日発句の種類と諸本」（『連歌俳諧研究』第40号、昭和四十六年三月）の研究がある。
- (3) 『新山家』の編集方法については、辻村尚子「其角『新山家』の方法」（『近世文藝』第83号、平成十八年一月）において考察した。
- (4) 『いつを昔』が当初『誹番匠』という書名で刊行される予定であったこと、ならびにその書名が変更された理由については、乾裕幸氏「蕉門俳書の生立ち―『いつを昔』のばあい」（『周縁の歌学史』平成元年六月、桜楓社所収）に詳しい。
- (5) 芭蕉書簡の引用は、今栄蔵氏『芭蕉書簡大成』（平成十七年、角川書店）による。
- (6) 今栄蔵氏『芭蕉年譜大成』（平成六年、角川書店）による。
- (7) 引用は、今栄蔵氏「翻刻『芭蕉翁全傳』（『芭蕉伝記の諸問題』平成四年、新典社所収）による。
- (8) 延宝・天和期の其角と芭蕉の関係については辻村尚子「其角のころみ―『田舎之句合』から『俳諧次韻』へ―」（『連歌俳諧研究』第104号、平成十五年二月）において論じた。

- (9) 引用は、『猿蓑』所収本文（新日本古典文学大系70『芭蕉七部集』平成二年、岩波書店）による。
- (10) 貞享・元禄期における芭蕉・其角を中心とした発句対発句の唱和の広がりについては、稲葉有祐氏「挑発としての唱和―貞享・元禄期蕉風考」（『立教大学日本文学』第106号、平成二十三年七月）に詳しい。

本稿は平成二十二年博士学位申請論文「其角と蕉門俳諧の研究」より成稿したものである。なお、引用の一部に現在では配慮の必要な表現が含まれるが、時代的背景を鑑み、原文のままとした。

（ねごろ・なおこ 公益財団法人柿衛文庫学芸員）